児童福祉施設や里親家庭を巣立つ若者たちの伴走者のためのブックレット

サポーティブ・アダルト *Supportive Adults*

インターナショナル・フォスターケア・アライアンス
International Foster Care Alliance [IFCA]

IFCA
International Foster Care Alliance

目次

P.3　このブックレットを手に取るみなさまへ
- IFCAの活動
- サポーティブ・アダルト（SA）という言葉の背景には
- このブックレットからわかる3つのこと

P.4　SAという存在の意義 …SAの研究やユースの声からわかってきたこと
- SAとは何か…
- SAとは誰か・何をする人なのか

P.5　SAになる人が心得ておくべきこと
- SAに出会うために

P.6　ユース・アダルト・パートナーシップ（YA-P）とは？
- 当事者団体の中でのユースと大人のかかわり方

P.7　IFCA のSAは、実際にどんなことをしてユースを支えているのか
- 日本で活動中のIFCAのSAによるメッセージ
- SA募集要項

このブックレットのなかで使われる言葉

社会的養護とは、保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うことです。社会的養護は、「子どもの最善の利益のために」と「社会全体で子どもを育む」を理念として行われています。代替養育には、様々な形態があり、家庭環境を基盤としたものには、里親やファミリーホームがあります。また、児童養護施設などの施設でケアが提供されることもあります。フォスターケアとは、アメリカで使われている、日本でいうところの「社会的養護」を意味する言葉です。

当事者・ユース：フォスターケアで育っている子どもや、里親委託や児童福祉施設措置が解除されて、社会的養護のシステムから離れた人のことを指します。このブックレットのなかでは、当事者を、端的に「ユース」と呼びます。

パーマネンシーとは、「家族のようなつながり」を持つ人との継続的な人間関係のことです。血縁関係のある家庭の外に措置されている自立をひかえたユースのためには、家庭復帰、養子縁組、後見人など、法的なパーマネンシーの保障の方法があります。近年、それに加えて「ひとりの信頼できる大人との関係を保つ」ことも、パーマネンシーのひとつとして見直されるようになりました。

ユースボイスとは、あらゆる会議や決定の場面において、ユースを正当なメンバーとして位置づける考え方のことです。この場合「会議」とは、児童相談所の職員や養育者などをまじえて、ユースについての話し合いをする場や、多数のユースに影響を与える政策協議なども含めた、すべての会合のことを指します。

以下の2つの用語については、このブックレットの中で詳しく解説があるので、ここでは簡単に説明すると、

サポーティブ・アダルト（SA）とは、ユースが自ら選んだ信頼できる大人のことです。
“ナチュラル・メンター”、“インフォーマルなサポーター”などと呼ばれる場合もあります。

ユース・アダルト・パートナーシップ（YA-P）とは、ユースと大人がお互いの価値を見いだせる関係をつくることです。例えば、大人が会議の下準備をし、ユースが会議の議題づくりと進行を務める、などです。

このブックレットを手に取るみなさまへ

私たちは、**インターナショナル・フォスターケア・アライアンス［IFCA・イフカ］**という団体です。

2012年に日本とアメリカに社会的養護で育った若者たちのチームを結成し、メンバーが1年に1度、お互いの国を訪ね、児童福祉の制度やしくみについて学び、自分たちの当事者としての経験と提言を様々な場で発信してきました。

この国際的な活動からユースたちが実感したことは、日本とアメリカでは、文化やシステムが大きく異なるにもかかわらず、児童福祉施設や里親家庭を巣立ち、自立する当事者の現状は酷似しているということでした。修学や就労の問題、安全な住宅の確保を必要とする青年期から大人への移行期に親族などの頼れる大人がいないということが、ふたつの国の若者たちの自立を困難にしていました。一般の若者たちよりも、早く大人になることを強いられた結果、セーフティーネットを失った日米の多くのユースたちが、失業や住居を失うといった現実に直面し、貧困と隣り合わせで生活をしていました。

フォスターケアを離れて自立するユースが、毎年、アメリカには約2万5千人、日本には約2千人いると言われています。国や制度の違いを超えて、ユースたちが今最も必要としているものに「**サポーティブ・アダルト(SA)**の存在」があります。私たちは、多くの人たちにこの「サポーティブ・アダルト」のあり方や重要性を理解してもらうために、このブックレットを作成しました。

アメリカにも、サポーティブ・アダルトについての研究が多数あるわけではありません。ただ、「サポーティブ・アダルト」という言葉が頻繁に使われるようになった背景には、以下のような歴史的な経緯がありました。

1935年、米国では連邦政府が自立支援予算を確保するための法律を樹立しました。ここでフォスターケアで育った子どもたちの自立を国家規模で支援することが決まりました。これは、現在の日本とは大きく異なる点でしょう。

1999年、連邦議会で「チェーフィー自立支援プログラム」という新しい法案が可決されました。国が提供する自立支援は18歳から21歳に拡充され、予算も倍増しました。

「チェーフィー自立支援プログラム」の樹立から10年後、ユースたちのその後の人生を明らかにした追跡調査のレポートが発表されました。結果は、厳しいものでした。ユースの大学進学や雇用、メンタルヘルスに関する状況はほとんど改善されておらず、自立に向けての支援の内容が見直されるようになりました。それまでは、自立に必要なスキルのみを指導し、経済的、物質的に手厚い支援が主流だったのです。

米国でも年齢が高いユースの養子縁組はたいへん難しく、多くのユースたちは、パーマネンシーを保障されることなく、独りで措置解除を迎えます。自立支援プログラムの効果検証のデータからは、家族的なつながりのないユースの自立には、どんな支援をもってしても、困難が多いことが判明しました。

ユースは、「**たった一人でもよい。措置解除になる前に、自分を親身になって応援し、寄り添い、支える大人が必要だ**」ということを訴えたのです。

このブックレットを読むことにより、3つのことがわかります。

1. **フォスターユースの自立には、少なくともひとりの大人との継続的な繋がりが重要なこと。**それは、ユースの声により証明されていること。
2. **サポーティブ・アダルト(SA)とは、どんな人を指すのか、その特徴や役割について。**それに加え、SAとの出会い方についても具体的な説明があります。
3. **大人がユースたちとどのようにかかわっていけばよいのか？** ここでは、個人的なユースとのかかわりだけでなく、当事者団体におけるユースとの関係の築き方とパートナーシップの取り方についても解説があります。

このブックレットを、児童福祉の関係者、自立支援に携わる関係者、施設関係者・里親、NPO団体のスタッフなど、多くの方たちに活用してほしいと思います。

サポーティブ・アダルト（SA）という存在の意義 …
アメリカの研究や、ユースの声を聴くことからわかってきたこと

- フォスターユースは、パーマネンシーに対する独特の感じ方・考え方を持っています。さまざまな調査から、かれらが養子縁組や後見人制度のような法律的なパーマネンシーよりも、ひとりの頼れる大人との生涯を通じた家族のような関係から得る“情緒的なパーマネンシー”、そして、愛情とコミットメントから成る絆を求めていることがわかりました。
- フォスターケアを離れる若者たちには、心を開いて話し合え、自分を支えてくれる大人が必要です。SAがともに居ることにより、ユースたちの社会的・経済的な状況が改善されます。レジリエンス、およびレジリエンスを促進する要素の研究によると、家族的な繋がりの形成は、子どもの発育に深い関係があることがわかりました。
- ひとり、もしくは複数の大人の愛情や支援は、子どもたちの前に立ちはだかるあらゆるリスクからかれらを守り、将来、健全な人間関係を築く鍵になることもわかっています。
- 自分とともに伴走する大人がいることは、ユースのトラウマや心的ストレスからの回復を促進します。米国では、ユースが措置解除される前の「自立支援会議」で、当事者であるユースが中心になって、会議に参加する人たちを集めます。ユースが自分の自立に必要なサービスや環境を整えることを自発的に進める方法は効果を上げています。

サポーティブ・アダルトとはだれか？

SAには３つのカテゴリーがあります。

1. 年上のきょうだいなど、身内の人間。（親戚は含むが、実親は含まない。）
2. ユースがすでに身近でつきあっている人たち。例えば、学校の先生やスポーツコーチ、過去に、ユースの担当だったケースワーカーや雇用者だった人たちなどです。
3. ユースの人生において、非公式な役割を持っている人。例えば、所属している団体の指導的な立場の人や、友人の両親などです。

サポーティブ・アダルトの特徴

- ユースがどんなことでも安心して話せる存在だという信頼感を抱ける人
- ユースの生活に安定感を与えてくれる人
- ユースが必要な時にそばにいてくれる人
- 連絡のとれる人---「常にそのユースと会えなければならない」というわけではありません
- 継続的な関係を保つことができる人
- ユースの意見や行動を尊重している人
- 自分の経験もシェアし、ユースに対してオープンになれる人

サポーティブ・アダルトは何をするのか？

- 本来の飾らぬ自分であり続け、ユースを尊重すること。
- 根気強く、いつもユースのためにそこに存在すること。そして、「何か私にできることはある？」と聞くこと。
- 人生の案内役のような励ましやアドバイスを与える。
- 心の支えになる。
- ロールモデル（人生のお手本）になる。
- ユースが就労活動の面接に行くとき車で送迎する等、実質的な支援をする。
- ユースに助けが必要な時、様々な方法を駆使してそのニーズに応える。
- 非常に大切なのは、楽しい時を過ごすこと。ユースが好むことを一緒にして、友情関係を築くこと。

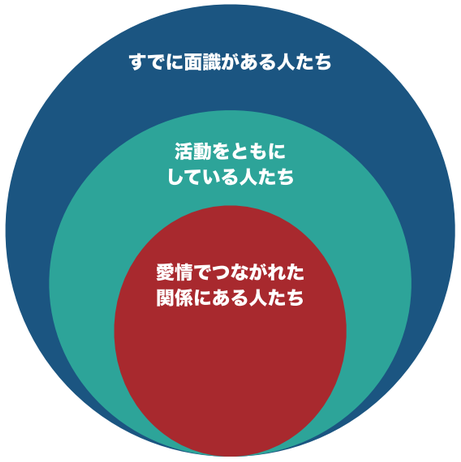
サポーティブ・アダルト（SA）になる人が心得ておくべきこと

- SAとは、ユースに対して権威的な態度をとる人物ではありません。関係の始まりが、かれらのコーチや上司からだったとしても、SAは、助言やアドバイスを与えてくれる存在であり、指図や規則を言い渡す人ではありません。
- フォスターケアで育った若者たちを取り巻く社会状況や制度について、よく知ることが大切です。それらを理解することが、SAの第一歩といえるでしょう。
- ユースは、肉親や他の大人の行動がもとで、社会的養護のシステムのなかに身を投じられてしまったという経験があります。そのことが原因で、ユースにとって大人を信頼することが難しい場合があると理解しておく必要があります。
- ユースには力があると信じることができること、未熟に思えるような場面においても尊重と敬意の思いを基本的にもっていることが重要です。
- ユースとのコミュニケーションのやりとりが難しいと感じる時があるかもしれません。そのような時はユースも同じように感じ、苦労を感じているかもしれません。
- 関係を築くことを強いられているという感覚、つまり、ユースに心の準備がないまま、大人の方からユースに強引なアプローチをすると、うまくいかない原因になります。
- ユースと大人との間には、お互いが傷つきたくない、傷つけたくないという気持ちが生じることがあります。お互いの関係づくりに対する期待が高いために、失敗したらどうしようという危惧もあります。
- お金は、大人とユースの力関係を実感させるもののひとつです。若い人とのコミュニケーションで何かをご馳走したりする場面はよくありますが、ユースとの関係では、安易にお金を使って関係性をつくらないことも大切です。

サポーティブ・アダルト（SA）に出会うために…

ユースがなかなかSAと出会えない場合、まわりの人たちは、どのように手助けしたらよいでしょうか？

ユースの周囲には、本人が気づいていなくても、意外にたくさんの人たちがいるものです。
ユースと一緒に十分な時間をとって、かれらの社会的なつながりを**“人間関係マップ”**に整理していくと、将来の計画が立てやすくなります。そのステップとして、以下の質問を順に尋ねていくことを薦めます。



ユースが、自分を取り巻く大人との関係を整理するための“人間関係マップ”

（1）愛情でつながれた関係にある人たち

- あなたが一緒に暮らしている人たちは誰ですか。
- あなたがいちばん親近感の持てる人たちは誰ですか。
- 跳び上がるほど嬉しい時、あるいはどうしようもなく悲しい時、電話やメールをする相手はだれですか。
- 誰といちばんたくさんの時間を過ごしますか。

（2）活動をともにしている人たち

- あなたの好きなこと（スポーツや趣味）を一緒にする人たちはだれですか。
- どんなクラブ活動やユースの活動に所属していますか。

（3）すでに面識のある人たち

- 「こんにちは」と気軽にあいさつできる人たちの名前をあげてください。
- あなたの児童相談所の担当者は誰ですか。
- 大勢の人たちが集まる場所では、誰に声をかけますか。
- クラスの中で、この生徒と友だちになりたいな、と感じながらも、友だちづきあいのない人はいますか。

社会的養護の当事者団体におけるユースとSAの関係と役割

ここまでは、ユースとSAの一対一の関係についてお話してきました。ここからは、社会的養護の当事者団体におけるユースとSAの関係と役割について、IFCA の一組織としての経験も交えて、考えていきます。

若者と大人で構成されている団体にも、大人につねに決定権がある団体、ユースが主導権を握っている団体など、組織運営の方法はさまざまです。

IFCAは **“ユース・アダルト・パートナーシップ（YA-P）”** の関係を保ちながら、活動を進めてきました。このYA-P という言葉には、ユースと大人の考えやアイデアが、同等の価値を持って活動において検討・反映され、両者が平等に決定権を持つ環境という意味があります。そして、その環境を維持するには、大人たちが、ユースが直面している問題や、かれらの生活に影響をおよぼす世の中の仕組みや政策について関心を抱き、積極的に活動を支える姿勢が必要です。

私たちは、この“YA-P”という関係づくりと、児童福祉施設や里親家庭で育った子どもたちが自分の声（ユース・ボイス）を持って生きることに、深いつながりがあると考えます。

IFCA のユースたちは、講演活動や会議の場で、自らの経験を話し、伝えてきました。かれらの人生のストーリーからは、人生を生き抜いた自身の姿が垣間見え、力強く、説得力があります。当事者としての語りは、社会を啓発することに貢献するだけでなく、自身のエンパワメントにもつながります。そして、ユースが声を発信することを最大限に支援できるのは、ほかの誰でもない、SAです。

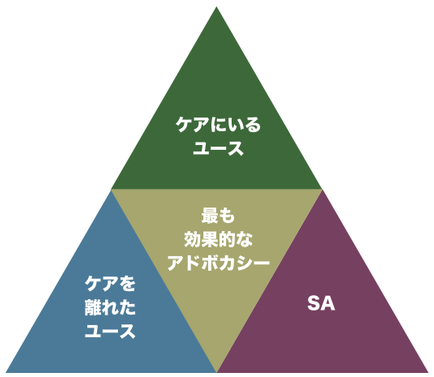
IFCA のSAは、ユースたちが、海外・国内のプログラムをつうじて、内面的に大きく成長するのを見てきました。その要因のひとつに、“YA-P”に基づいた関係づくりがあると思います。若者と大人が発言・決定権を共有する空間では、大人たちは、ユースの意欲や能力が、団体だけでなく、社会全体に貢献すると信じています。

米国のいくつかの研究からは、YA-Pが若者たちのレジリエンスと深い関係があることが、立証されています。大人たちとの信頼関係の中で育まれたユースたちは、失敗を恐れず自分の可能性に挑戦し、肯定的で、人の立場に立って物事が考えられる人物に成長することがわかっています。

組織内のSAには、ユースたちが意味のある『社会参画』と『自己挑戦』ができるような機会を開拓する役目があります。より効果的なYA-Pを築くためには、

- ユースと大人が、お互いのパートナーシップによって、何を目指し成し遂げたいのかを明確にし、各々の役割と責任を確認し合うことが必要です。
- また、上層部を含む団体のすべての人間が、YA-Pの理念や考え方を共有することも重要です。

大人のメンバーだけで構成される評議会や顧問委員会にユースを委員として加える際は、その目的を明確にすることが必要です。ユースを物理的に大人たちの会議に参加させるだけでは十分とはいえません。若者たちの伝えたいメッセージが何なのかに耳を傾け、大人だからこそ手が届く社会資源をつうじて、効果的にそのメッセージを発信する道を開くのが、真のユース参画への協力の姿勢と言えます。



ユースの声を広く伝えるために、また、社会的養護を改善するためにアドボカシー運動を実践している団体・またはこれから実践しようと考えている団体の方々へ

この**三角形**をご覧になってください。最も効果的なアドボカシー活動には３つの異なるグループが共存しています。

1）現在、社会的養護のもとで生活するユース
2）ケアを既に離れたユース
3）サポーティブ・アダルト

ユース・アドボカシーの場でも、**YA-P**が土台になっています。

IFCAのSAは、実際にどんなことをしてユースを支えているのか?

IFCAは現在、日本の数か所の都市でユースチームを編成し、各々の地域チームに、SAを配置して、団体を運営しています。

IFCAのSAは、元当事者ユース、弁護士、研究者、臨床心理士、社会福祉士など、さまざまな経歴と職業を持った人たちの集まりですが、かれらのすべてが、このブックレットの５ページにある「SAの特徴」を生かして、若者たちと接しています。

具体的には、ユースが渡米する前の手続きの手助け、スピーチ原稿の校正、登壇活動への同行、資料の提供、イベントや月例ミーティングの場所の確保、外部機関との連絡・交渉などの役割を担っています。そして、SAの役目の中でも、とても重要なことは、ユースたちの仕事に対して、建設的なフィードバックを与えるということです。

私たちは、SAや理事を含めた団体のすべての大人が、ユース・メンバーが当事者参画を最大限にできる環境づくりに専念してきました。IFCA のユースたちは、SAとの共同作業において、プログラム作成、出版物の執筆・編集、団体の広報など、重要な役目を果たし、リーダーシップのスキルを身につけています。

（上）元ユースのユキカさんが SA になり、ちひろさんとススムくんにチームリーダーのバトンタッチをしました。
（中）SAの筒井さんは会場でユースの発表準備のため撮影機器をセットアップします。
（下）静岡チームのユースとSAの月例ミーティングの様子です。

日本で活動中のIFCAのSAによるメッセージ

IFCAのユースの登壇活動をシアトルではじめてみたとき「新しい風が吹いている！」と感じました。日本のユースメンバーが、米国で堂々と自分たちの制度を語り、自分の経験を共有していたのです。

私は、それまでにも、社会的養護の当事者活動をサポートしてきましたが、SAの考え方を知りませんでしたし、当事者活動をサポートすることの難しさを痛感していました。

IFCAのユースグループのSA・理事となって、ユースのもつパワーや可能性を日々感じています。ときには、社会的養護を巣立った若者の多くが経験するように、IFCAのユースもさまざまな困難に直面することがありますが、できる限りのサポートをしたいと思っています。それは、やはり、ユースのもつ声には大きな力があると信じているからです。私は、ユースの皆さんを尊敬しています。

同じように考えているIFCAの理事やSAと出会えたことも、その信念を支えています。また、実際にユースが参画し、多くの制度を変えてきた米国やカナダの様子から多くのことを学んでいます。
（永野咲）

IFCAの活動を通じてSAという概念を知ったとき、自分が悩みながら続けてきたことに名前がある、ということに気づかされました。”supportive”（支援する）という言葉が入っていますが、「助けてあげる大人」ではないところが重要です。

社会的養護で育ったユースたちが育ってくるなかで感じてきた困難、変えようとしている課題は、社会のなかで生み出されてきたものです。その課題を改善していくために、一人ひとりの知恵と力が求められています。その課題をともに変えたいと願う同志、それがSAではないでしょうか。同志という関係性は、支える一方ではありません。ユースとともに過ごした時間は、私に多くのことを教えてくれました。そのことにより、私自身が生きていくうえで楽になったことも少なくありません。ときには、いろいろと衝突することやトラブルもありますが、それも含め、楽しんでいくこと、ユーモアを忘れずにいることが大切だと思っています。
（長瀬正子）

児童相談所を退職した後も、当時担当していたユース数人との関係が続いています。SAという概念を与えてもらい、自分の役割がよく理解できました。

私はIFCAのSAとしての活動はまだ日が浅いのですが、SAのことを学べば学ぶほど、施設や里親宅を離れるユースにとって気軽に相談したり、話ができる大人がいることが大切だということを実感します。大人も自分たちの役割がわかれば、もっとＳＡとして活動する人は増えると思います。
（久保樹里）

IFCA ユースチームは、SAを募集しています！

IFCAは現在、全国各地でユースチームを結成しユースとSAが協働しています。
ユースの活動を支えていきたいとお考えの方は、ぜひ、このメールアドレスまでご連絡ください。

info@ifcaseattle.org

参考資料

- ジャニス・コール 「サポーティブ・アダルト」（パワーポイント、2014年3月）
- メリッサ・ラップ 「社会的養護を巣立つユースたちへの支援」（パワーポイント、2017年3月）
- 粟津美穂 「ユース活動と大人の役割」（パワーポイント、2017年12月）
- 厚生労働省「社会的養護の現状について（参考資料）2017年12月
- Advocates for Youth, “Building Effective Youth-Adult Partnerships” Transitions, Vol.14, No.1, October 2001.
- Casey Family Services’ Center for Effective Child Welfare Practice, in collaboration with California Permanency for Youth Project, Casey Family Programs, and the Jim Casey Youth Opportunities Initiative, Inc., “A Call to Action: An Integrated Approach to Youth Permanency and Preparation for Adulthood”.
- Child Welfare Information Gateway-Children’s Bureau/ACYF/ACF/HHS, “Enhancing Permanency for Youth in Out-of-home Care” May 2013.
- Collins and Spenser, “Supporting Youth in the Transition from Foster Care: Formal and Informal Connection”, Child Welfare, Vol.89, No.1, January 2010.
- Gresson, Usher and Griwtein-Weiss, “One adult who is crazy about you: Can natural mentoring relationships increase assets among youth adults with and without foster care experience?”, Children and Youth Services Review, December 2009.
- The Jim Casey Youth Opportunities Initiative, “Chafee Plus Ten: A Vision for the Next Decade”, April 2010.
- Thompson, Gresson and Brunsink, “Natural mentoring among older youth in and aging out of foster care”, Children and Youth Services Review, December 2015.
- Zeldin, Christens and Powers, “The Psychology and Practice of Youth-Adult Partnership: Bridging Generations for Youth Development and Community”, American Journal of Community Psychology, October 2012.
- Zeldin, Gauley, Krauss, Kornbluh and Collura, “Youth-Adult Partnership and Youth Civic Development: Cross-National Analyses for Scholars and Field Professionals, Youth and Society, Sage Publication, August 2015.

International Foster Care Alliance

IFCAのミッションは、国を超えた多様な考えの交流、協働、つながりづくりを通じて、子ども家庭福祉のシステムを前進させることです。私たちは、すべての子どもと若者が愛され、支えられ、自身の可能性を最大限に発揮できる社会を目指し、

3つの領域で事業を展開しています。

1）ユース：児童福祉施設や里親家庭で育った若者たちの国を超えた交流と協働のためのプログラム
2）ケアギバー： 里親や施設スタッフなど、子どもの日々のケアにあたる人たちのための支援プログラム
3）プロフェッショナル：ケースワーカーや臨床心理士など、子ども家庭福祉の分野で働く専門職のためのプログラム

サポーティブ・アダルト - 児童福祉施設や里親家庭を巣立つ若者たちの伴走者のためのブックレット　2019年2月10日発行

編集チーム・メンバー
粟津美穂 （IFCA エグゼクティブ・ディレクター）
久保樹里（大阪歯科大学　医療保険学部　口腔保健学科）
長瀬正子（佛教大学社会福祉学部　社会福祉学科）
永野咲（昭和女子大学　人間社会学部　福祉社会学科）

表紙画：粟津潔
デザイン/レイアウト：粟津美穂・小野寺孝恵（DESIGNTYM）

■ このブックレットをお求めの方は、お名前と住所、ご希望の部数を書いて、下記のメールアドレスにお送りください。

International Foster Care Alliance [IFCA]
〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷1-33-6-202
TEL 010-1-888-447-IFCA (4322)

メールアドレス **info@ifcaseattle.org**　IFCAのホームページ　**http://www.ifcaseattle.org**

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

このブックレットは、日本財団の協力と助成により、発行の運びとなりました。
ここに御礼申し上げます。